近畿学校保健学会通信

№61

昭和63年10月31日発行
近畿学校保健学会事務所
〒640 和歌山市九番丁27
和歌山県立医科大学衛生学教室内
TEL 0734-26-8324（直通）
振替口座　大阪4-107021番

第35回近畿学校保健学会を終えて

第35回近畿学校保健学会
会長　金井秀子

去る6月12日に京都教育大学におきまして、第35回近畿学校保健学会が開催されました。連日の大雨で懸念しておりましたが、当日は早朝からは小降りとなり、午前中にすっかりあがるという幸運に恵まれた学会になりました。

早朝より伊東祐一、川畑愛義、山田　一名誉会員の先生方をはじめ多数の会員の皆様方に御出席いただきまして有難く感謝申し上げます。近畿各地からはもとより、遠隔地からの参加者も加え、午前中は3会場に分かれて37題（39題申込み中2題取消し）の研究発表があり、終始熱心に討論がおこなわれました。

午後からの特別講演では京都府立医科大学教授整形外科部長榊田喜三郎先生を迎えて「スポーツ障害予防と保健指導」についての講演がおこなわれました。発育期にある子どもの骨や関節の解剖学的構造や最近問題となっている関節障害について、更にその予防とトレーニングの方法について多くのスライドを用いて、豊富な臨床症例をあげ、非常にわかり易く、実際的に役立つ示唆に富んだ講演でありました。

シンポジウムの「小児心身症予防における家庭と学校の役割」では、子どもの精神保健を小児科医、児童精神科医、カウンセラー、と養護教諭の四人の方々から経験をもとに話題を提供して頂き、活発な質疑応答がなされ、この領域に多くの関心が寄せられた事は主催者として大変有難い事でした。

総会におきまして、佐守信男、圓山一郎、山本勝朗先生が名誉会員に推挙され、私が先生方に名誉会員記をお渡しする栄をえました。

講演後の懇親会にもたくさんの会員の方々が参加され、和やかな雰囲気のもとに歓談していただくことができました。また京都教育大学学長蜂須賀弘久先生にも御多忙のところ御出席いただきました。

本学会が盛会のうちに充実したものとなりましたことは大変嬉しく、心から感謝申し上げます。

総会におきまして和歌山県立医大教授武田真太郎先生が本学会の幹事長として再任されました。次回の第36回学会は兵庫で神戸大医学部教授住野公昭先生が会長として開催されることになっています。

最後になりましたが今回の学会に寄せられました会員の先生方の御熱意と御支援、幹事ならびに評議員の諸先生方の御協力に御礼申し上げます。さらに、京都府教委・京都市教委の御後援、京都府医師会・京都府歯科医師会・京都府学校薬剤師会の御協賛、御援助頂いた会社各位にたいしまして厚く感謝いたします。また当地評議員の先生方には御助言や御協力賜りましたことを深く御礼申し上げます。特に幹事長の武田真太郎先生には御懇篤なる御指導を賜わりましたことをここに深謝いたします。

第35回近畿学校保健学会報告

本年度学会は京都地区のお世話により、昭和63年６月12日(日)、京都教育大学において開催され、名誉会員をはじめ、多数の会員が参加して終始熱心に討論がおこなわれました。深草少将と小野小町のゆかりの地ということで、緑の多い静かなキャンパスが、夜来の雨にしっとりとぬれ、落ちついた雰囲気のなか、会場だけは熱気にあふれ、盛会裡に終了しました。この学会の特色ある企画と運営に非常な御尽力をいただいた金井秀子学会長、寺田光世事務局長、山際哲夫事務局次長をはじめ多くの京都地区の会員の方々に、心からお礼申し上げます。

以下、当日の総会の記録ならびに一般講演、特別講演、シンポジウムそれぞれの座長の先生方のコメントを記して、学会報告にかえます。

（幹事長）

１．総会記録

１）学会長挨拶

第35回年次学会長の金井秀子京都教育大学教授が挨拶。

２）議長選出

松岡勇二 和歌山大学教授が全員の拍手により議長に選出された。

３）議事

(1) 昭和62年度会務報告

① 会員数　339名（昭和63年３月末日現在）

② 会議の開催、学会通信の発行など

昭和62年５月９日	第１回幹事会
５月21日	学会通信No.57発行
６月20日	和歌山大学において第34回年次学会を開催（会長　松岡勇二 教授）
６月20日	和歌山大学において昭和62年度評議委員会及び総会を開催
８月19日	学会通信No.58発行
12月５日	第２回幹事会
昭和63年２月２日	学会通信No.59発行

③ 昭和63・64年度学会役員の選出について

幹事長より別紙のとおりの評議員・幹事の選出されたこと、また、幹事の互選により武田が幹事長に再選されたことが報告され、了承された。

なお、監事についても幹事長から再任のお願いがあり、了承された。

(2) 昭和62年度決算報告

武田幹事長より報告があり、横尾監事の監査報告をうけて承認された（別表１）。

(3) 昭和63年度予算案について

武田幹事長より説明があり承認された（別表２）。

(4) 名誉会員の推挙について

幹事長より、新しい名誉会員として、幹事会から評議員会に対して、圓山一郎（明治44年生れ、元大阪教育大学教授）、山本勝朗（大正３年生れ、大阪市立大学名誉教授）、佐守信男（大正５年生れ、神戸大学名誉教授）が推挙され、評議員会の承認があった旨報告され、全員の拍手をもって迎えられ、金井会長から名誉会員証が手交された。

(5) 次期（第36回）年次学会開催地および会長について

第36回年次学会は兵庫地区で開催されることが了承され、学会長を神戸大学　住野公昭教授にお願いすることになった。

近畿学校保健学会 昭和62年度決算報告

収入の部

	昭和62年度予算	昭和62年度決算	増　減	摘　要
会費収入	780,000	753,000	△27,000	会費納入者 251名
繰越金	378,948	378,948	0	
雑収入	2,000	6,410	4,410	利息
計	1,160,948	1,138,358	△22,590	

支出の部

	昭和62年度予算	昭和62年度決算	増　減	摘　要
印刷費	350,000	237,500	△ 112,500	通信№57、58、59
郵送費	140,000	128,665	△ 11,335	
事務費	80,000	65,030	△ 14,970	
人件費	45,000	36,000	△ 9,000	
会議費	50,000	19,690	△ 30,310	
交通費	10,000	2,130	△ 7,870	
第34回学会費	150,000	150,000	0	和歌山へ支払分
予備費	335,948	0	163,395	
次年度へ繰越	—	499,343		
計	1,160,948	1,138,358	△ 22,590	

会計監査の結果、以上の通り相違ないことを認めます。

昭和63年4月30日

監事　三宅義信

監事　横尾能範

近畿学校保健学会 昭和63年度予算案

収入の部

	収　入　額	摘　　要
会費収入	780,000	260名
繰越金	499,343	
雑収入	3,000	
計	1,282,343	

支出の部

	支　出　額	摘　　要
印刷費	300,000	通信No.60、61、62
郵送費	140,000	
事務費	100,000	事務書類保管用キャビネットを含む
人件費	45,000	
会議費	30,000	
交通費	10,000	
第35回学会費	200,000	前払い済み
予備費	457,343	
計	1,282,343	

近畿学校保健学会評議員

○印は幹事、▲印は新評議員、監は監事

◇滋賀県

▲板持　紘子（滋賀大学教育学部　附属中学校）
植村　良雄（滋賀県医師会学校保健技師）
大村　芳子（養護教諭部会）
川副　　茂（滋賀県学校薬剤師部会）
○木戸　増子（滋賀県教育委員会保健体育課）
桑名勇三郎（大津市教育委員会）
小林　清基（東診療所(県医師会学校医部長)）
▲谷口　久男（滋賀県歯科医師会）
○林　　正（滋賀大学　教育学部）
萬木由利子（養護教諭部会）
宮田　英子（滋賀大学教育学部）
山岸　司久（滋賀大学　保健管理センター）
山元　善弘（滋賀県歯科医師会学校歯科理事）
伊藤　昭三（大津市立石山小学校）
▲鵜飼　房子（養護教諭部会）
▲○大矢　紀昭（滋賀医大　小児科学教室）
蒲生　芳子（養護教諭部会）
▲草野　薫子（大津市教育委員会学校保健課）
▲小西　　実（草津高校）
谷川　尚己（草津市教育委員会）
▲南条　　徹（滋賀県医師会）
藤井　義顕（滋賀県医師会会長）
▲松本　美彦（坂田小学校）
八幡　　修（保健主事会）
山口　金治（滋賀県学校薬剤師部会）

◇京都府

今井　英彦（京都教育大学保健管理センター）
▲上田　　宏（京都府学校歯科医会）
奥　　正規（京都市医師会学校医会）
金山　政喜（京都府医師会学校医会）
木村　静雄（立命館大学名誉教授）
小西　博喜（京都工芸繊維大学）
庄司　博延（京都女子大学）
▲杉浦　守邦（蘇生会病院・健康増進センター）
高島　雅行（京都市学校医会）
▲妻形八重子（京都市教育委員会）
▲友久　久雄（京都教育大学）
永田　久紀（京都府公害研究所）
▲長谷川博久（京都府学校歯科医会）
▲平野登志子（華頂短期大学）
古川　太一（京都府医師会学校医会）
監 三宅　義信（大阪薫英女子短大）
▲山岸似佐美（京都市立北白川小学校）
▲山田　良久（龍谷大学健康管理センター）
吉村磯次郎（京都女子大学）
岩井　信之（京都大学保健体育）
○小川　隆三（京都大学保健管理センター）
○金井　秀子（京都教育大学　体育学科）
北村　李軒（武田病院）
小島　廣政（京都産業大学）
嶋田　靖子（京都府教育庁指導部保健体育課）
▲白滝　忠光（京都府学校薬剤師会会長）
○瀬戸　　進（大谷大学　文学部）
田辺　明之（京都府医師会長）
○寺田　光世（京都教育大学）
中西　浩三（京都府保健主事会長）
▲橋詰　澄雄（京都府教育庁指導部保健体育課）
○日比野朔郎（京都府立大学）
福田　　潤（京都府医師会）
牧野　節子（京都府養護部会長）
八木　　保（京都大学教養部　保健体育）
▲山際　哲夫（京都教育大学体育学科衛生学教室）
吉岡　文雄（京都女子大学）
○米田　幸雄（京都女子大学家政学部被服衛生学）

◇兵庫県

青山　泰子（神戸市立苅藻中学校）
荒木　　勉（兵庫教育大学）
▲池田猪佐巳（兵庫教育大学）
今出　悦子（西宮市立西宮高校）
家治川　豊（神戸大学　教養部）
▲○住野　公昭（神戸大学医学部公衆衛生学教室）
▲田中　洋一（神戸大学　教育学部）
塚本　利之（兵庫医科大学）
▲長谷川ちゆ子（西脇市立西脇小学校）
▲水野　陽子（西宮市教育委員会　学校保健課）
▲三野　　耕（兵庫教育大学）
室　　明（兵庫県学校薬剤師会会長）
監 横尾　能範（神戸大学教育学部養護教育研究室）
明瀬　好子（神戸市立布引中学校）
五十嵐裕子（神戸大学教育学部附属明石中学校）
和泉　正人（学校医）
岡本　靖子（兵庫県教育委員会　体育保健課）
近藤　文子（兵庫女子短大）
立石　光代（兵庫県立夢野台高校）
田辺　和子（元宝塚市立御殿山中学校）
出井　梨枝（神戸市立須磨高校）
○美崎　教正（神戸大学　教養部）
南　　哲（神戸大学　教育学部）
▲村井　俊郎（兵庫県学校歯科医会　会長）
○山城　正之（神戸大学　教育学部）

◇大阪府

朝井　　均（大阪教育大学保健管理センター）
阿部　昌宏（大阪摂南大学）
安藤　　格（立花病院）
井上　忠宏（大阪府医師会）
○上延富久治（大阪教育大学）
○大山　良徳（大阪大学　健康体育部）
小野　忠義（大阪女子短期大学）
白木彌一郎（大阪府学校薬剤師会）
○上林　久雄（大阪教育大学）
後藤　　章（大阪教育大学）
坂本　吉正（大阪市立大学　生活科学部）
白石　龍生（大阪教育大学）
進　龍太郎（大阪教育大学）
田中　桂子（大阪市立扇町中学校）
○仲井　正名（大阪教育大学　平野分校）
難波　英子（関西女子短期大学）
福本　絹子（大阪成蹊女子短期大学）
堀内　康生（国立療養所仙石荘）
増田　　勉（四天王寺国際仏教大学）
松嶋　紀子（大阪教育大学　平野分校）
南口　公恵（大阪女子短期大学）
▲三好　暢子（大阪市教育委員会）
柳井　　勉（大阪教育大学）
山本　信弘（大阪教育大学）
○吉田　浩重（大阪大学　健康体育部）
東　　真実（大阪教育大学　平野分校）
天富美彌子（大阪教育大学）
一色　　玄（大阪市立大学医学部小児学教室）
○今井　英夫（大阪女子短期大学）
大迫　昌三（大阪市学校薬剤師会）
小河　弘之（大阪教育大学）
角道　静枝（東我孫子中学校）
川辺　克信（大阪市保健主事部会）
楠本久美子（大阪教育大附属高校天王寺校舎）
○後藤　英二（大阪教育大学）
▲新谷万里子（大阪市立集英小学校）
須藤　勝見（大阪教育大学　平野分校）
辻　　立世（府立千里高校　養護教諭）
中村　篤夫（大阪府学校保健会）
平井　富弘（大阪医療短期大学）
藤岡　千秋（大阪教育大学保健学教室）
本庄　康一（大阪市立桑津小学校）
松岡　　弘（大阪教育大学）
松原ヒサエ（日本生活医研）
三村　寛一（大阪教育大学）
森　喜代子（大阪市教育委員会）
▲山下　秋二（大阪大学　健康体育部）
吉田　熙延（大阪市立小児保健センター）
吉田　福子（元・大手前高校）

◇奈良県

荒地　秀明（天理大学　体育学部）
▲乾井　　実（奈良県教育委員会保健体育課）
喜多　　稔（奈良県薬剤師会　会長）
島崎レイ子（養教部会長）
○竹内　宏一（奈良教育大学）
○橘　　重美（神戸学院大学）
○出口　庄佑（奈良女子大）
西信　元嗣（奈良医大）
▲藤田　康子（奈良県教育委員会保健体育課）
▲守田　幸美（奈良県養護教育研究会　会長）
○山本　公弘（奈良女子大学　保健管理センター）
▲有山　雄基（奈良県医師会　会長）
▲浦久保　繁（奈良県教育委員会保健体育課）
唐沢　友江（養護教諭高校会）
▲北村　翰男（奈良県学校薬剤師会学術委員長）
▲嶋田　良文（奈良県教育委員会保健体育課）
竹田　斌郎（奈良市医師会・学校医部会）
▲谷掛　駿介（奈良市学校医会　幹事）
○中牟田正幸（奈良教育大）
▲福岡　保郎（奈良県歯科医師会　会長）
▲的場　一晃（奈良市学校医会　会長）
▲八木　　哲（奈良市学校医会　幹事）

◇和歌山県

猪尾　和弘（和歌山大学　保健管理センター）
笠松　勇次（鳴門教育大学）
金尾　　宏（和歌山県学校薬剤師会）
木下　　裕（和歌山県医師会）
島　　利夫（和歌山県薬剤師会）
○武田真太郎（和歌山県立医科大学衛生学教室）
○虎谷　良雄（和歌山県医師会）
中西　　正（和歌山市教育委員会保健体育課）
根来　康司（和歌山県教育庁　保健体育課）
橋本　　勉（和歌山県立医大公衆衛生学教室）
松本　健治（和歌山県立医科大学衛生学教室）
▲向山　桂子（和歌山県養護教育研究会　会長）
○矢田　俊作（和歌山県学校保健主事会）
米良　至剛（新宮市医師会）
井原　義行（和歌山県高野口保健所）
加藤　　弘（和歌山大学教育学部　保健体育）
川口　吉雄（和歌山県学校歯科医師会）
左海　伸夫（スミヤ・スポーツ科学センター）
鈴木　町子（和歌山市教育委員会保健体育課）
辻本　信輝（和歌山県歯科医師会）
中　　俊博（和歌山大学　保健体育）
中村　靖男（和歌山県医師会）
野田　康夫（和歌山県保健主事研究会）
○松岡　勇二（和歌山大学　保健体育）
宮西　照夫（和歌山大学　保健管理センター）
森下　律子（金屋町立鳥屋城小学校）
吉田　　穣（和歌山県学校薬剤師会）
和田　寿子（和歌山市養護教諭研究会）

２．一般講演についての座長コメント

第１会場

演題番号（101～103）　　林　　正
（滋　賀　大）

101：Ｋ女子大生 263 名について、日常摂取している食品名、摂取回数、体位との相関について検討したものである。有色野菜、淡色野菜、魚介類等で知らない食品が２～３あった事、並びに３日間の摂取回数を食品別にみた場合は個人差が大きいこと、身長、体重と各食品分類別の摂取回数との相関は認められなかった事等が報告された。摂取食品の知名度もさることながら、摂取食品の栄養バランスと、自宅、寮、下宿等における相違が示されると興味深い。

102：1985年のＮ小６年（男102名女98名）の I.Q と体位、その他の測定項目との相関関係で、男子では身長、体力点、推理洞察、動作の速さ等の４項目で、女子では身長、体重、ローレル指数、体力、運動能力、推理洞察、注意力等の７項目で有意な相関が認められたこと。並びに1987年のＩ中２年（男107名、女106名）の体位と知能偏差値との相関において、女子では身長と有意な相関が認められたことから、小６では体位と知能間にはほとんど時代差が認められない。最近では同じ地域の小中学生間ではやや様相が異りつつあるとの報告であった。学力（文部省報告資料）と I.Q （Ｎ小６年）、知能偏差値（Ｉ中２年）というように、それぞれの標本に対する指標が異って用いられているので、同一次元での考察が困難ではないかと思われる。

103：学校保健統計資料（1949年～1986年）によって、身長、座高の測定値より求めた下肢長（身長－座高）の最大発育年令を求めて、その年次推移から若年化の傾向を検討したものである。下肢長の若年化の推移は男女間で２年の時差、身長との時差は男子４年、女子３年であって、下肢長の若年化が進行していることが報告された。男子の1938年以降の急速な若年化がみられたが、女子では同様の傾向がみられなかった事に対して質問がなされた。これに対して女子では1938年当時すでに急速な若年化が進行していたためとの説明がなされた。下肢長の年次推移の検討はその時代の児童生徒の発育環境をよく反映する指標と考えられる。1960年以降の男子の頭うちの傾向と女子の若年化傾向が異っているのは、性差の特徴とあわせて興味深い。

演題番号（104～105）　　竹　内　宏　一
（奈良教育大）

104：演者らは、最大発育年令（MIA）に関する一連の研究を行っているが、今回は女子スポーツ選手の MIA と初経年令との関係をみている。その結果 MIA から初経年令までの期間は、スポーツ選手群の方が対照群より有意に長かった。運動種目別にみると、その期間の比較的長いのは、バスケットボールと硬式庭球であった。こうした運動におけるどのような因子が、とくに身長発育や成熟に関

与しているのかの解明が期待されよう。また、そのことが、望ましい身体発育や生理機能の発達を指導する際に参考にもなろう。

105：通常、個人の体力・運動能力は、その人の暦年令に相当する全国平均値を標準値として評価することが多い。ここでは、暦年令ではなく成熟度として身長の最大発育年令（MIA）を標準値として、握力の分布を検討した基礎的研究である。その結果、暦年令でなく生理的年令によって各成熟度の分布状態をみると、早熟的なものでは暦年令よりも評価が低くなり、晩熟的なものは暦年令よりも評価が高くなる傾向を示した。握力以外の運動能力についても検討が望まれよう。

演題番号（106～107）　　瀬戸　進（大谷大）

106の大山らは日常の歩行能力と脚の伸展及び屈曲筋内の青年期の発達を一般女子大生についてCybex IIを用いて計測速度を低速60°/S と高速180°/Sで、体格、体力、運動能力から14項目を選び、重回帰分析をし、説明率30%を目安に推定しうる実用的な説明変数項目のバッテリー化を意図している。共通性の高い項目としては身長、年齢、1000m走の3項目に瞬発力のいづれかの1項目または握力、立位体前屈が時に絡み、以上の3～4項目としている。

107の山本らはダーウン症児の成人時の低身長について追究しようとしている。S市養護学校のD症児6～17歳の9～12年間を追跡し、S市健常児のS20年からの25年間の縦断的資料と比較し、年齢別平均値では健常児との差は6歳で男－5.5cm、女－4.7cm、11歳では男－6cmに対し女－11.4cmと約2倍、15歳で男－16.1cm、女－12.8cm、17歳男－18.1cmと低くなっている。年間増加量のピークではD症児は男10歳、女8歳で健常児よりも2年の前傾傾向がみられる。

演題番号（108～110）　　吉田浩重（大阪大）

108：アメリカ東部の某教員養成系大学における保健関係の講義を参観して印象づけられた問題と、そのとき入手された教授要目から、同職の立場において吸収すべきポイントをまとめられた研究であった。

安全・救急の概念を整理して、そこから到達すべき目標へと指導体系を築きあげ、理論と実際とが結びつく活きた教育をしなければならないことを強調された意義深いものである。

109：演題取消し

110：刻々、成長・発育する児童の四測値について入学当初より蓄えたデータに基づき、個人別に図表化するようプログラムを組み、4、5年の児童に配布した結果、児童自身、保護者および、担任教員からの反応・好評を得たという、パソコンの活用事例である。前述三者の発育に関する興味・関心を導き出そうとする努力と工夫がうかがえる。保健委員児童がデータ入力を委員会活動として実施する姿は将来の社会活動を示唆しているようで、パソコンを用いての教育のあり方の幅の広さを知らさ

れた。

演題番号（111～113）　　大　山　良　徳
（大　阪　大）

111：スキー実習に関する保健学的研究(1)　加藤弘ほか

本研究は、4泊5日のスキー実習中における学生の疲労に関する主観的調査や血圧、尿などの客観的測定と、併せて外傷や傷害に関する調査を行い、健康管理に役立てることを目的としたものである。とりわけ、心拍メモリー装置を用いて、24時間の心拍変動を連続記録して検討したところに特徴がある。これによると、実習の内容によっても異なるが、尿検およびスキー事故からみて重篤な事故がなかったことが指摘された。運動の強度は、心拍数からその程度をうかがい知ることができるが、本研究はこの種の研究における比較検討の基準を明確にした点で意義あるものと考える。

112：運動選手の禁煙が呼吸循環機能に及ぼす影響　後和美朝ほか

本研究は、運動選手や喫煙者にとって大変関心を寄せる資料を提供している。禁煙は呼吸循環系にどのような影響を及ぼすのであろうか。後和らは、4名の成人男子喫煙者に4週間の禁煙を行わせ、週毎の肺機能、酸素摂取量、二酸化炭素排出量および心拍数を指標として検討した。それによると、肺機能関係では安静時および運動後の指標において、増加傾向を認めたが有意でなかったこと、また心肺機能においても、必ずしも有意な影響を及ぼさなかったと報告した。このように、禁煙による気道抵抗の軽減は認めたものの、明確な結果がえられなかった背景には、演者らも指摘しているように禁煙期間や被検者数の問題もあるが、これらを克服して今後の新しい成果に期待できる興味深い研究といえるであろう。

113：はだし運動者の下腿血流反応について　寺田光世ほか

子どもの体力つくりや健康増進の立場から、はだし教育に関する研究と実践活動については多く報告されている。本報告は、はだし教育そのものの報告ではなく、はだしについての生理学的知見をうる目的で、はだし運動者として柔道部、剣道部、空手部員を、またその対照被検者をして日常靴を着用しているハンドボール部、バスケットボール部員の協力をえて、はだし運動者の特徴を下腿血流反応から明らかにしようとしたものである。

本報告の意義は、部生活5～7年にわたり、はだしでトレーニングしたものとそうでないものとの間に、差がみられるかどうかを下腿血流反応から言及した点にある。それによれば、有意差は認められなかったが、(1)はだし運動者に足部皮膚温が低かったこと、(2)はだしで歩くとき、またはだしでジョギングするときは、いずれにおいてもはだし運動者は靴着用者に比べ血流増加量は大であったという。これが耐寒性、抗疲労能に関係しているとすれば興味深く、さらに一層の研究を期待いたしたいものである。

第２会場

演題番号（201～202）

小　島　広　政
（京都産大）

（201）「異なる教育環境下での思春期女子生徒の心身の適応状態についての一考察」

矯正施設において教育を受けている女子生徒と一般高校の女子生徒。この両群に対し、適応状況調査（身体・精神症状、自我強度・不安尺度の調査等）を実施され比較されたユニークな研究であるが同年齢代（14～20歳）にもかかわらず両群に明らかな意識差がみられたことは、これらの研究結果を基に、非行以前の現場の教育において、参考にすべき教材の一つがみいだされたものと思う。つまり矯正施設の女子生徒は、一般女子高校生に比較して柔軟な適応性が乏しく、自我の確立が未熟であり身体的・精神的な不安が大で、不定愁訴が多いというのが特徴である。入所後は罪の意識を感じ、年齢が高くなるにつれ、将来に対し不安をいだいているということであるが、これらのことは施設に入る迄にも何らかの前兆傾向が発見できたはず。小・中学校においての性格検査や意識調査の重要性はここにあると思う。

（202）「心因性視力障害を呈した小児の情緒的適応様式について」

今日、慢性的疲労状況におかれている児童・生徒の中で、しばしば認められるものに心因性視覚障害があるが、この研究は、心因性視覚障害と診断された女子７名の児童・生徒に対し、内的欲求、conflict, frustration 耐性、及び適応様式を、WISC-R, P-F study, SCT などの心理検査を実施された。

視覚に焦点をあてられたということは、視覚は学習において中心的役割を負う器官であり、このことは非常にユニークである。

被検者は、心因性視覚障害という自己の苦痛な体験の中で、正常な視力の友人をうらやましがり、早く目をなおしたいと努力しているのが被検者らの共通点である。

P-F study により推測される frustration 状況での適応様式は「社会性が未熟で、攻撃性を率直に表現するタイプ」と「情緒的表現に対する抑制が強く、frustration を無罰化及び内罰化しようとするタイプ」といった性格がみいだされたことは、これからのこの種の研究に対して大きな参考資料になるだろう。

演題番号（203～205）

今　井　英　彦
（京都教育大）

203：昭和57年～昭和60年の３年間に、京都府立精神衛生総合センターに来所した、児童・生徒85名の分析である。殊に不登校20名についての原因に関して、両親との関係に注目。同性の親の、子供に与える影響が提示された。

後の質問会で示されたが、父親の逃避的態度、母親の過干渉と甘やかしが指摘された。

また、本人の性格も含めた内因性とは別に、中学生の不登校において、「いじめ」が尚多く原因となっていることは、興味深い。

204：社会福祉学における G. Hamilton の「情況の中の人間」という視点から、不登校状態に陥った一卵生双生児の症例を、主に家庭背景を取り上げ、その治療経過を示した。

引きこもりがちなA子に対する支持的療法、陽性のB子に対する浄化法の利用、そして、大いなる情況となる母親に対する反省的考察を通して、2児共に登校状態に到るが、実に適切な治療である。質問会では、学校との連係の取り方についてが、問われた。

205：昭和60～62年に登校拒否症状を示し、小児精神外来を受診した、中学生と高校生38名に対する心理学的アプローチであった。全員にロールシャッハ、MMPI、KDCL、PF スタディ、SCT、を実施した。

その結果、自我強度の低さ、現実への適応能力の未熟さ、無罰的傾向、また両親への「分離不安」と陰性感情のアンビバレンツ等が提示された。

演題番号（206～207）　　寺　田　光　世
（京都教育大）

206：本研究は、中学3年時に身体症状として発熱、吐きけ、気分が悪い、などの訴えのほか、精神症状として「死にそうや」、「しんどい」、「あかんわ」をくり返し、無気力で保健室登校を続ける生徒に対する中学校の取り組み方をまとめた事例的研究である。現在は、公立高校へ進学し、保健室登校もなく通学しているが、このような事例を通して、学校は精神保健の予防の場、人格形成の場との認識を強め、生徒に問題が発生する以前に指導をすることが大切であると指摘している。

207：本研究は演題206に続づく研究で、中学校における精神保健に関する定期健康診断の事後措置としての保健指導のあり方を検討したものである。

定期に実施するものはYG性格検査で、事後の保健指導内容としては、「こころの健康チェック」「一生を通じてのこころの健康」、「自立について」などであり、これらの指導を通して、「こころは成長するもの」、「3年間で自分がどのように変わるか知りたい」というような自己の受けとめ方の変化が認められたとしている。

演題番号（208～210）　　山　本　公　弘
（奈良女子大）

208：（山中憲子氏他：自分のからだをみつめ健康な生活をきずき自立する子をめざして―子どもの実態より―）：子どもと保護者を対象にアンケート調査を行ない、朝自分で起きられない子、朝食の内容に問題のある子、朝食を食べていない子、朝の排便をしていない子、夜遅くまで起きている子などが目立ったことなどについて発表された。また、これらの結果は保護者にもフィードバックし、家庭と学校が一体となってその改善に努めていることを述べられた。現場における熱意に敬意を表した

い。

209：取り消し。

210：（中神　勝氏他：大学生の健康観、体力観）：大学生、短大生の男女2,383名を対象として調査され、健康観については「病気をしていない」（身体的意味あいが強いもののうち）、「悩みごとがない」（精神的意味あいが強いもののうち）、「協調性をもつ」（社会的意味あいが強いもののうち）が多かったこと、体力観については行動体力（運動や作業能力に関するもの）が一番多かったことなどについて発表された。これらの結果が今後の健康教育に生かされることが期待される。

演題番号（211～213）　　松　岡　　弘
（大阪教育大学）

性教育関係の発表は3題であった。211番の久保和生は奈良市内の小学生と教師を対象に性意識調査を行い、212番の疋田育美他は精神遅滞児生徒の性発達と性行動の調査を行い、213番の川口俊彦他は矯正施設収容児と公立高校生を対象に性行動を比較検討した。

いずれも貴重な研究であり、フロアーからも活発な質疑応答があった。今後の課題として教育実践研究の発表が待たれる。

第3会場

演題番号（301～303）　　米　田　幸　雄
（京都女子大）

この3つの演題は、何れも健康調査に関するものである。

301：京都教育大では、学生の健康状態の把握のためにCMI調査を行っている。この調査票を入学手続きの書類と同封して送ることにより調査が自然に、抵抗なく行われ、回収率も100％近くに向上したと報告された。また、調査票だけでは不完全であるので、入学後、心電図検査と並行して、一回生全員の面接を行うことにより、スクリーニングを、より完全にすることができると結ばれた。

302：大学入学志願者の調査書健康欄の記載方法に不備があり、そのため、健康状態把握の資料として信頼性を欠くものがあるという報告である。記載方法の問題点として、記載の意味が不明、必要事項の空欄、記載方法の不統一、転記ミスと推定されるもの、その他をあげ、このような記載方法の不備は近頃、増加の傾向にあると結ばれた。討論者によれば、このような問題は奈良女子大学だけではなく、多くの大学でもみられ、困ったことであると追加された。

303：岡山県の某児童相談所に来所した中学生に、中学生用簡易健康調査質問紙票を用いて、その集団的特性、情緒安定性を求めたものである。相談所訪問者を学校不適応群と非行群に大別して、対象と比較すると、前者では、神経過敏や易怒性が、後者では、緊張性のものが多い傾向にあり、また、

男女を比較すると男子に易怒性が、女子に抑うつ性が強いと報告された。

演題番号（304～306）　　上　林　久　雄
（大阪教育大）

〔304〕私立女子中高校生の過去11年間の歯科検診についての成果の発表があったが、特に検診の実施にあたって、生徒保健委員が中心となって検診の介助をおこなわせ、教師は単に生徒の引率指導にあたる方式でおこなった結果、生徒の歯科検診率や処置率が年々向上した成果が注目された。学校保健活動における生徒保健委員会の活動が学校保健活動の活性化につながることを立派に証明した報告例として評価したい。

〔305〕パソコンによる身体計測統計と通知票のプログラムパッケージの配布についての発表は、演者の永年にわたる健康診断結果のコンピューター処理の成果を述べられたもので、今後の学校保健管理に資するところが大きいと考えられる。ただ、現時点においても、多くの「コンピューター・アンルギー」なる学校保健関係者もいることから、今後の学校保健にコンピューターの活用を深めるため演題としてその成果を発表するだけでなく、展示として具体的な機器の取扱い、ソフトの使用等を発表の代りにおこなった方が効果的ではないかと考える。

〔306〕大学生の不定愁訴について、アンケート法で愁訴の内容を調べたて統計的に処理しようとする発表であった。ただ、これらの不定愁訴は、調査時期、性別、その他環境要因で変化するものでもあり、これらの要因を考えながら今後引続き検討されることが要望される。

演題番号（307～308）　　山　際　哲　夫
（京都教育大）

307：大学運動クラブの学生が、スポーツ傷害予防に対してどのような意識をもっているか？また、そのためにどのようなことがなされているのかを調査した報告であった。ウォーミング・アップと比較してクーリング・ダウンに対する意識が低く、またどちらもその意義を十分に理解されずに漫然と行なっている例が多く、必ずしもこれらの施行者において、傷害が少ないという結果ではなかった。自分にあった防止対策を考えるべきであるとしている。

308：骨に外力が加わると骨の圧電気現象によってその力に比例して電気が生じることは以前より報告があるが、演者は瞬間衝撃力は Weight と Speed 加わると、想像以上の瞬間衝撃力が加わるとし、今回の実験では骨に80kgの力を加えると1mvの2相性の圧電気が生じ、その出現時間は1msとのことであった。しかし、まだスポーツ骨折の予防にこの結果を生かすところまではいっていないとのことであった。

演題番号（309～311）　　美　崎　教　正
（神　戸　大）

中学校における保健室の実態と理想像を対比させながら、健康教育の拠点としての保健室のあり方について検討を加えることは意義が大きい。演者らは、この点に着目し、二つのアンケート調査を実施した。

演題309では、某中学校三年生373名を対象にした「保健室の利用状況調査」の結果をもとに、生徒の保健室利用経験、頻度、時期を男女別に比較し、女性が優位に利用度が高いことなどから、女性の保健室への依存度の大きいことを指摘した。

演題310では、自覚症状調査（C.M.I.変法）をもとに、中学生のもつ自覚症の訴え率傾向から、女性は有訴率が高く体調に関心が高かったとしている。しかし、神経症的愁訴（深町の判定領域）は、男女共に比較的高率を示し、中学生が精神的健康状態に関心が高いことを物語っているとし、中学校における「心の健康問題への取組」の必要性を強調した。

演題311では、309、310で得られたデータをもとに、保健室利用回数と自覚症調査のクロス表分析を行ない、この両者間に有意相関が認められないながらも、頻回来室者の中に精神的自覚症を持つものが多い傾向を示すこととともに、保健室の利用回数からだけでは把握出来ない健康問題があることをも指摘した。この意味から、保健室の役割として、来室者も含めて、全ての生徒に対する保健的接触の必要性を強く指摘したもので、ただ保健室の中からのみ生徒を見るのではなく、生徒一人一人を取り巻く環境との中で生徒が成長・発達を遂げていることをふまえ、地域保健の中での学校保健という立場から接近しなければならないことを予見する発表となった。

今回の一連の発表(309、310、311）に対し、フロアー（神戸・向洋中学校　明瀬）から、それぞれ学校独自の「校則」「保健室の利用方法」があり、それが保健室の利用状況に大きく影響するのではないか、また「校則」により「真の保健室」としての性格が失われることも考えられるので、これらの要因分析も必要ではないかとの指摘がなされた。最後に、座長から、①今回男女差を問題にした理由、②処理結果だけでなく、アンケート内容を呈示する必要性、③アンケートによる利用状況調査の結果と実際に保健室で取り扱った症状・病状記録との関係、④中学生を取り巻く学校環境・家庭環境等、社会的要因との相関分析の必要性などが指摘され、「保健室の将来像とそれへの対策」に向けての演者の個人的主張に大きな期待が持たれた発表であった。

演題番号（312～313）　　妻　形　八重子
（京都市教委）

312：中学校における最近の保健室の現状として心の不安定が原因と考えられる身体症状や行動異常を示す生徒の中、養護教諭の対応が非常に困難な15症例について報告があった。

診断・症状は登校拒否、心因反応、ヒステリー、過換気症候群、腸炎、体重減少、不定愁訴等である。

原因と考えられることは、家庭・学校環境友人関係がふくそうしていること、頻回来室生徒には親

子関係の稀薄や思春期の心の不安定さがあり、これには、生徒にゆっくり接してしっかりと受け止め必要な手だてを講じていく援助が大切である。

313：近年、アレルギー疾患が増加傾向にあり、教育現場で適切な対応が迫られているが、この疾患に対する今後の取組みに資する目的で6齢から17齢までのり患状況の報告があった。

アンケートによる喘息り患状況は8齢がピークで9％、最低は15齢で1％、湿疹は6齢がピークで33％、最低は15齢で7％、鼻炎は8齢で27％、最低は16齢で10％のり患率を示している。また、湿疹にり患している生徒の51％が困ると答え、そのうち7％は何もしていない。鼻炎では68％が困ると答え51％が何もしていないと答えている。

アレルギー疾患は小・中・高校生を通して高り患率を示し困る症状があるのに何もしていない現状の中で今後、適切な対策を考える必要がある。

3．特別講演

京都府立医科大学教授　榊田喜三郎：

〝スポーツ障害予防と保健指導〟のまとめ

座長　金　井　秀　子

整形外科学・スポーツ医学の分野の権威として深い学識と35年の臨床経験をおもちの先生から「スポーツ障害予防と保健指導」をテーマとして、医学の専門分野の立場から沢山のスライドを用いて非常にわかり易く解説していただきました。

近年我国のスポーツに対する著しい関心の高まりを我国のスポーツ人口の変遷と近年の増加の現状をオリンピック参加人数等から示された。それに伴い我国のスポーツが盛んになり、スポーツ障害が増加している。とりわけ高度な技術が要求されるスポーツでは、低年齢層からハードトレイニングが常識となっているため、それに伴う子どものスポーツによる弊害も大きい。その予防について充分留意する必要があると述べられた。

子どもの骨は軟骨が多く、力の加わりかたによっては傷つき易く、小さい子どもほど著しい。その上、骨や関節の成長過程にあるためしばしば恒久的な骨や関節の障害を残し易い。この事実を多くのスライドで明解に示された。

次に原因として〝使い過ぎ〟、〝うさぎ跳び等の誤ったトレーニング〟、〝ストレッチングの不足〟および〝扁平足・O脚・下肢の過度内稔〟がある。スポーツ指導の際、個々の子どもの身体特徴を充分に把握することが必要であると同時に、運動能力・体力の年齢的発達とその個人差に充分留意した指導が極めて重要であることを力説された。

スポーツ障害の治療と再発予防はトレーニング方法、靴やラケット等の考慮、環境因等のチェックを本人が自ら行ない、小さい子どもに対しては指導者が充分留意する必要がある。学校検診で扁平足・内股・O脚等を有する子どもを発見することと靴のかがとの減り方を注意深く観察することが発見のてがかりとなると結ばれた。

4．シンポジウム

"子どもの心身症予防における家庭と学校の役割"

座長　友　久　久　雄

最近、学校保健における子どもの健康についての関心が、かつての身体に基礎疾患を持つ子どもから、精神・心理的な問題を持つ子どもへのケアーへと変りつつある。

近畿学校保健学会における過去数年のシンポジュームの演題をみても、学校生活における自己表現と自己主張（29回京都）、最近の青少年の心身の発育・発達と学校保健（31回大阪）、養護教諭の課題と展望（32回奈良）、生活指導と学校保健―いじめや非行をめぐって―（34回和歌山　30回および33回はシンポジュームが開催されなかった）などこころの健康に関するものが増えている。

そこで本年度は、近年特に増加の傾向にあり、また学校においても養護教諭の関る機会が多くなってきた心身症について、その予防における家庭と学校の役割を中心に考えてみることにした。

まず、家庭の役割ということで、誰かお母さんからの話題提供が望ましかったが、実際には引き受け手がなかった。そこで、心身症の予防と治療の際に、直接家庭や学校と接する機会を持つ、小児科医・精神科医・学校カウンセラーと、養護教諭の先生方に、それぞれの立場から話題提供をお願いした。

まず最初に、京都第二赤十字病院の水田隆三先生からは小児科医の立場から、心身症の定義・学齢期の特徴・小児科医の役割などが述べられた。また、児童精神医学や小児心身医学などは確立された分野でなく、その診断や治療に関しても統一した見解はなく、心に悩みを持つ子ども達に愛情と信頼を持って、根気よく接していくことが大切であり、家庭や教育関係者の役割が大きいことを強調された。

次いで、京都市児童福祉センター診療所の門真一郎先生からは児童精神科医の立場から、登校拒否の予防についてというタイトルで話題提供がなされた。特に、疾病や障害の予防には、一次予防（障害の発生の予防）、二次予防（障害の診断と悪化拡大の予防）、三次予防（固定した障害による能力低下の予防）があると述べ、社会や学校における差異弁別の偏重と絶えざる序列化が登校拒否発生には関係すると述べられた。また、不登校という現象ばかりに眼を奪われず、心理社会的発達に眼を向け、登校拒否は治すものではなく、くぐり抜けるもの、脱ぎ捨てるものであると説明された。

また、京都市立永松記念教育センター相談課の栗原元一先生からは、カウンセラーの立場から、まず教育相談の実態が述べられ、次いで、子どもの悩み、親の許え、先生の困惑における共通点として身体の不調、対人関係におけるストレス、感情の起伏が激しく不安定、無気力無関心が目立つと述べられた。また、家庭における対話の復活、親の自立、学校における価値観の多様化・自己表現力をのばすことの大切さとともに、子どもの心身症的訴えを心のいたみとして受けとることの必要性が強調された。

最後に、京都市立朱雀第八小学校の栗山千代美先生からは、養護教諭の立場から、ひとりひとりの子どもを大切に―小学校の保健室を訪れる子ども達を通して―ということで、子ども達の訴えの内容特徴、個別指導計画、訴えの受けとめ方、校内体制についてなど話された。

その後、予定時間が超過したにもかかわらず、フロアーから、具体的な子どもの指導のあり方、学校・家庭・病院・教育研究所などそれぞれの専門機関の連携のあり方、特に病院より学校へ出向いてもらえないかなど活発な意見が出た。また、学校における差異弁別の偏重および絶えざる序列化に対する鋭い質問があり、より内容の深まりが期待されたが、時間の関係上打ち切らざるを得なかったことを座長としてお詫びするとともに誠に残念であった。

しかし、このシンポジュームで話題提供されたことおよび討論されたことは、実際の学校現場での子ども達の「こころの健康」を維持増進させるために重要なことを含んでいた。今日のシンポジュームが明日からの教育活動の一助となれば幸いである。

第36回近畿学校保健学会の予告

会　長　神戸大学医学部　住　野　公　昭　教　授
会　期　昭和64年6月24日(土)の予定
会　場　兵　庫　県　民　会　館

《日本学校保健学会の案内》

下記のとおり開催されますので、近畿学校保健学会同様積極的に御参加下さい。

◎第36回日本学校保健学会

会　　長　国立公衆衛生院次長　高　石　昌　弘
会　　期　昭和63年10月27日(㈮)・28日(土)
会　　場　都市センター（東京都千代田区平河町２）

昭和63年度会費納入について

第28回近畿学校保健学会総会において学会会則が改正され、昭和57年度より会員制が明確に打ち出されております。したがって、年会費を納入されないと、翌年度から学会通信その他の案内が送られなくなります。

昭和62・63年度会費(各3,000円）が未納の会員の方は、至急同封の振替用紙を使って、学会事務所まで納入されますようお願いします。